

『法華経』における地涌菩薩について

—— 現実世界への関与

菅野博史

はじめに

本稿では、『法華経』に出る地涌菩薩⁽¹⁾について考察する。仏教はしばしば厭世主義と規定されるが、中国の太虚(1890-1947)が提唱した人間仏教⁽²⁾の理念は、死後の救済を重視するのではなく、われわれがそこに住み活動する現実の社会を重視する仏教思想を樹立した。太虚には『法華講演録』⁽²⁾があるが、彼の人間仏教の理念は、『法華経』と直接の関係がないようである。一方、日本では、日蓮(1222-1282)の仏教思想のなかに、

他の仏教思想とは相違して、現実の社会を重視する態度を見て取ることが出来る。日蓮も死後の往生浄土の思想を厳しく批判しながら、この娑婆世界での救済を重視した。このような日蓮の思想は、『法華経』の思想から啓発されたものであることは言うまでもない。⁽³⁾日蓮は、「法華経の行者」を自任し、常不軽菩薩の実践⁽⁴⁾を継承することを強調した。晩年になって、地涌菩薩のなかの上行菩薩の自覚を持ったことも知られている。⁽⁵⁾日蓮の場合の現実重視の思想は、若いときからの法華経の行者としての自覚と関係が深く、晩年に出る地涌

菩薩の自覚とは必ずしも関係がないようにも見えるが、法華經の行者の延長上に、地涌菩薩の自覚を位置づけることも可能であろう。

一方、日本の宗教界において大きな影響力を持つ創価学会の第二代会長、戸田城聖氏（1900-1958）⁶が地涌菩薩の自覚を持ったことは、創価学会の思想・実践に深い影響を与えたと考えられる。また、創価学会を含む現代日本の法華系新宗教の現実社会重視の態度にも、新宗教の一般的傾向として現世利益を強調するという理由以外に、『法華經』、および地涌菩薩の思想が影響を与えていることが予想される。

そこで、本稿では、現実世界への積極的関与という視点のもとで、『法華經』における地涌菩薩について考察する。

第一節において、『法華經』法師品第十から従地涌出品第十五までの物語の展開を簡潔に紹介し、第二節において、『法華經』における地涌菩薩について考察する。

1 法師品から従地涌出品までの物語の展開

『法華經』の物語の展開において、授学無学人記品第九と法師品第十の間に大きな相違がある。『法華經』全体の序である序品第一の次の方便品第二から授学無学人記品第九までは、一仏乗の思想とそれに基づく声聞授記がテーマとなっている。それに対して、法師品から従地涌出品第十五までの範囲は、釈尊が涅槃に入った後に、いったい誰が『法華經』を受持し、弘通するのかというテーマが底流をなしている。この範囲の物語の展開を簡潔に以下に紹介する。

法師品においては、釈尊が涅槃に入った後に、つまり無仏の世に、『法華經』を信仰する者は過去世において悟りを完成した偉大な菩薩であり、衆生を思う大慈悲心によって、あえてこの仏滅後の娑婆世界という穢土悪世を選んで生まれてきた願生の菩薩であることを明らかにしている。この願生の菩薩は、後の従地涌出品に出る地涌菩薩に対する説明となっていることにつ

いては後述する。

見宝塔品第十一においては、多宝塔の出現、三變土田(7)による娑婆世界とその周辺の世界の浄土化、十方世界の分身仏の集合、釈尊と多宝如来の二仏並坐などが説かれる。その後、聴衆は釈尊の神通力によって空中に上昇し、これ以降の説法は囑累品第二十二まで空中で行なわれる。その後、釈尊はまもなく涅槃に入ることを告げ、自分の死後、『法華経』を担う者はいったい誰かと聴衆に呼びかけるのである。一方、品の末尾の偈頌においては、釈尊滅後の『法華経』の受持が困難をきわめることを譬喩によって示している。

次の品は提婆達多品第十二であるが、この品は鳩摩羅什訳にはもともと無く、後に編入されたものであり、多くの学者が最後に『法華経』に編入された部分であることを認めている。少なくとも、現行テキストに関する限り、見宝塔品第十一と勸持品第十三とが直接連続した方がストーリーの展開は理解しやすい。

勸持品第十三においては、まず薬王菩薩・大衆説菩薩たちが、釈尊が涅槃に入った後に『法華経』を受持し、

弘通することを誓う。そして、釈尊死後の悪世の衆生は宗教的なレヴェルがきわめて低く、教化することが困難であるので、自分たちは偉大な忍耐の力を生じる必要があると述べる。次に、授記された五百の阿羅漢と八千の声聞たちが『法華経』の弘通を誓うが、菩薩の誓いと相違して、彼らの場合は、娑婆世界以外の他の国土における弘通と限定している。經典はその理由を明示していないが、声聞と菩薩の誓いを対照させると、声聞には菩薩の誓ったような偉大な忍耐の力が欠如しているので、とうてい宗教的なレヴェルの低い娑婆世界の衆生を相手に『法華経』を弘通することができないことが示唆されていると推定される。次に、摩訶波闍と耶輸陀羅などの比丘尼が釈尊によって授記されるが、彼女たちもまた、娑婆世界以外の他の国土で『法華経』を弘通することを誓う。品の末尾の偈頌においては、菩薩たちがいかなる迫害、法難にも堪え忍んで『法華経』を受持し、弘通するという決意を披瀝する。

次に安樂行品第十四においては、勸持品における菩薩たちの『法華経』弘通の誓願を受けて、釈尊滅後の悪

世における弘通の方法として、身・口・意・誓願の四安樂行を説く。⁽⁸⁾

勸持品には厳しい忍難弘経の精神が説かれ、安樂行品には一見すると社会や周囲の人間との融和を第一とするいわば妥協的精神が見られるために、中国の注釈家のなかには、この二品の相違について、次のように考えるものがあった。勸持品は高位の菩薩のための教えであり、安樂行品は初心の菩薩のための教えであるというものである。たとえば、吉蔵『法華義疏』卷第十には、

勸持品の末尾には、惡世で弘経すると、侮辱・非難され、多くの苦惱を受けるといつている。卑小な修行の流輩は、退転する気持ちを起こし、弘経することができない。だから、今、四つの修行に安住すれば、惡世にいても、いつも快樂を受けることを明かすのである。今、末世における弘経の模範的な方法を示そうとするので、この品を説くのである。

持品末云、惡世弘経、被毀辱誹謗、受諸苦惱。小行之流多生退沒、不能弘経。是故今明安住四行、

雖居惡世、常受快樂。今欲示末世弘経模軌、故説此品。(T. 4. 394a11-14)

とあり、智顛・灌頂『法華文句』卷第八下には、問う。これらの声聞たちは大士となった。なぜこの(娑婆世界の)土において弘経できないのか。答える。惡世において苦行弘経のできない、修行を始めたばかりの初心の菩薩たちを導くためである。(同じ理由で)また安樂行品を説こうとするのである。

問。此諸声聞已成大士。何故不能此土弘経。答。為引初心始行菩薩未能惡世苦行通経。復欲開於安樂行品也。(T. 34. 117b9-12)

とある。また同じく、

もし(位の低い)初依、始心の菩薩が円行を修行しようと思つて、濁世に入つて弘経しようとするれば、濁世に悩まされ、自己の修行は確立せず、また他を教化する働きもない。これらの人のために、(弘経の)方法を示して安樂行を明らかにする必要があるので、この(安樂行)品が説かれるのである。

若初依始心欲修円行、入濁弘經、為濁所惱、自行不立、亦無化功。為是人故、須示方法明安樂行、故有此品來也。(T34.118c28-119a3)

とある。

これらの解釈も可能な解釈の一つであろうが、他の解釈の可能性にも注意を払う必要があるであろう。

第一の解釈は次のようなものである。『法華經』の成立を歴史的に見る場合は、勸持品は、『法華經』成立の過程の初期の状況を反映したものであると解釈する。

『法華經』の最も重要な宗教的主張は一仏乗という、當時においては新しい、革命的な思想であった。その思想は、周囲の冷淡な、さらには厳しい批判・非難を呼び起こしたことが、勸持品の内容から推定される。⁽⁹⁾勸持品は、そのような厳しい状況のなかにおいて、『法華經』の担い手の「忍耐」の精神を強調している。安樂行品は、勸持品の成立よりも後の時代において、当時の社会や伝統的・保守的な仏教教団の一部(比較的大きな勢力を持っていたと推定される)との融和策を講じた段階の成立であると推定される。

第二の解釈は、勸持品と安樂行品との間に、高位と低位の菩薩に対する異なった教えを見るのではなく、むしろ連続性を見ようとするものである。勸持品の記述をよく見ると、決して攻撃的な布教を勧めているわけではなく、『法華經』の思想のもたらす必然的な運命としての迫害を指摘し、それに対する忍耐を説いていると見られる。この迫害は『法華經』の思想の運命である以上、避けることができないものではあるけれども、できるだけ不必要な軋轢を避けるために、慎重に社会や既成の仏教教団と関わっていくことが重要視される。そのための方法を説くのが安樂行品であると解釈される。私個人としては、今のところ後者の解釈の妥当性が大きいと考えている。

さて、次に従地涌出品十五において、釈尊死後の『法華經』受持・弘通の主体者がはじめてその正体を現わす。娑婆世界以外の他方世界からやって来た八恒河沙を超える多数の菩薩たちが『法華經』弘通を誓ったが、釈尊はその申し出を拒絶し、自分の世界である娑婆世界に六万恒河沙の菩薩がいて、『法華經』を弘通するのは彼

らであるという。そのとき、娑婆世界の下の虚空に住んでいた六万恒河沙の菩薩が大地を割って出現する。

これが地涌の菩薩である。弥勒は聴衆を代表して、この地涌菩薩はいかなる存在であるかを質問する（第一の質問）と、釈尊は自分の成仏以来、これまで教化してきた弟子であると答える。弥勒は、さらに釈尊が成仏してから四十余年という短い期間に、これほど多くの立派な菩薩を教化したことは信じがたいことであると質問する（第二の質問）。この弥勒の第二の質問に答えるという話の流れで、釈尊は、実は自分が成仏したのは四十余年前ではなく、五百塵点劫という譬喩で示される遠い昔であることを、次の如来寿量品において明かすのである。

つまり、開三顯一と並んで『法華経』の中心思想の一つである開近顯遠（久遠の釈尊の思想）を説き明かすのである。

次に、節を改めて、『法華経』の地涌菩薩に対する描写を取りあげて考察を加える。

2 『法華経』における地涌菩薩

2・1 従地涌出品の記述

はじめに、地涌菩薩の登場する従地涌出品を資料として、地涌菩薩の特徴がどのように描写されているのかを、いくつかの項目を立てて整理しよう。

(1) 地涌菩薩の数

地涌菩薩の数について、涌出品の冒頭には、

わが娑婆世界にはもともと六万恒河沙に等しい数の菩薩摩訶薩がおり、一々の菩薩にはそれぞれ六万恒河沙の随行者がいる。

我娑婆世界、自有六万恒河沙等菩薩摩訶薩。一

一菩薩各有六万恒河沙眷属。(T9, 39:25-27)

とある。六万恒河沙というおびただしい数の地涌菩薩がおり、⁽¹⁰⁾そして、一々の地涌菩薩には六万恒河沙の眷属（随行者、従者の意）がいると述べられている。一恒河沙は、ガンジス河の砂の数を意味し、その六万倍の数が六万恒河沙である。この眷属の数については、すぐ後の箇所では、次のように、より詳細に説明している。

一々の菩薩はすべて大勢の者たちの指導者であり、それぞれ六万恒河沙の随行者を引き連れていた。まして五万、四万、三万、二万、一万恒河沙の随行者を引き連れている者たちがいるのはなおさらである。まして乃至一恒河沙、二分の一の恒河沙、四分の一の恒河沙、乃至千万億那由佗分の一の恒河沙（の随行者を引き連れている者たちがいることは）なおさらである。まして千万億那由佗の随行者（を引き連れている者たちがいることは）なおさらである。まして億万の随行者（を引き連れている者たちがいることは）なおさらである。まして千万、百万、乃至一万（の随行者を引き連れている者たちがいることは）なおさらである。まして千、百、乃至十（の随行者を引き連れている者たちがいることは）なおさらである。まして五、四、三、二、一人の弟子を引き連れている者たちがいることはなおさらである。ましてただ自分だけで、（人々から）遠ざかる修行を好む者がいることはなおさらである。

一一菩薩皆是大衆唱導之首、各將六万恒河沙眷

属。況將五万四万三万二万一万恒河沙等眷属者。況復乃至一恒河沙半恒河沙四分之一。乃至千万億那由他分之一。況復千万億那由他眷属。況復億万眷属。況復千万百万乃至一万。況復一千一百乃至一十。況復將五四三二一弟子者。況復单已樂遠離行。如是等比無量無辺算數譬喻所不能知。（10p.412）

これによれば、一々の菩薩は、大勢の眷属を引き連れているので、「大衆唱導之首」と言われている。そして、眷属の最も多いものは六万恒河沙の眷属を引き連れ、最も少ない者は眷属が一人もいないとされる。そして、眷属の少ない菩薩ほど数が多いと述べられている⁽¹¹⁾。眷属は、地涌菩薩の教化した者を指すので、眷属が多いほど一般的には衆生教化の経験の豊かな、位の高い菩薩のはずである。もしそのような前提に立つと、眷属の多い高位の菩薩から眷属の少ない低位の菩薩になるほど、菩薩そのものの数は逆にしだいに多くなるとされるのである⁽¹²⁾。

(2) 地涌菩薩の涌出以前の住処

涌出品の冒頭で、釈尊は地涌菩薩について、すでに

引用したように、「我娑婆世界自有六万恒河沙等菩薩摩訶薩。」(40a25-26)と述べて、地涌菩薩の住処をたんに娑婆世界と言っているが、その六万恒河沙の菩薩が釈尊滅後の『法華経』の弘通を担うであろうという釈尊の声に於じて、大地が震裂し、その中からその菩薩たちが涌出するのである。そして、その菩薩たちの住処について、

以前から、すべて娑婆世界の下、この世界の虚空の中に住んでいた。

先在此娑婆世界之下此虚空中住。(40a23)

と述べられている。また、

これらの菩薩たちはみな娑婆世界の下、この世界の虚空のなかに住していた。

此諸菩薩皆於是娑婆世界之下此界虚空中住。

(41b4-5)

とある。地涌菩薩のこれまでの住処は、この娑婆世界の下の虚空とされている。仏教の世界観によれば、虚空の中に世界は浮かんでいる。何もない虚空に、そこに生まれてくる予定の衆生の業の力によって、どこか

らともなく風が吹いてきて、それが風輪の層となる。その上に水がたまって水輪の層ができ、さらにその上に金輪の層ができ、その上に大地(地輪)、山、海があるのである。したがって、大地が裂けて、下まで突き抜ければ、そこは虚空なのであり、地涌菩薩が虚空に住んでいたとされるのも納得できるであろう。では、大地の下方であって、上方とされないのはなぜであろうか。それは須弥山の上方は神々の住む世界とされるからであろう。神々は仏教では六道の一つで、輪廻する存在であるから、菩薩に比べればその位は低い。また、他方世界の菩薩が『法華経』の会座にやって来る場面があるが、その場合は、おそらく上方から飛来すると考えられる。したがって、地涌菩薩が、弥勒の発言にあるように、これまで見たことも聞いたこともない菩薩であるという条件を満たすための相応しい場所として、「娑婆世界の虚空の下」という住処は仏教の世界観としての合理性があると考えられる。

以上、地涌菩薩の住処について、仏教の世界観に基づいた説明を試みたが、一方、『法華文句』巻第九上には、

より宗教的な説明がなされている。

(地涌菩薩の)住処とは、常寂光土である。常は常の徳、寂は樂の徳、光は淨・我(の徳)にほかならない。これが(常樂我淨の)四徳の秘密の蔵であり、その住処である。不住の法によつて秘蔵の中に住する。「下方」とは、法性という深い根底、玄宗という窮極の境地であるので、「下方」という。下にあらるので此処こゝに属さず、空中なので彼処かゝに属さない。此処でもなく彼処でもないのは、中道にほかならない。此処から出現するので、上にもいず、この下にもいない。上でもなく下でもなく、空中に住するのも中道である。

住処者、常寂光土也。常即常德、寂即樂徳、光即淨我。是為四徳秘密之蔵、是其住処。以不住法住秘蔵中。下方者、法性之淵底、玄宗之極地、故言下方。在下不属此、空中不属彼。非此非彼、即中道也。出此、不在上、不在此下。不上不下、住在空中、亦是中道也。(T34.125a17)

と。つまり、地涌菩薩の住処について、常樂我淨の四

徳を備える常寂光土と表現し、さらに法性、玄宗、中道などと規定している。⁽¹³⁾地涌菩薩の高い境地を示唆したものであろう。

(3)地涌菩薩の身体的特徴——三十二相を中心として

地涌菩薩は、大人の相である三十二相を備えていると言われる。

これらの菩薩たちの身体はみな金色で、三十二相を備え、無量の光を放っている。

是諸菩薩身皆金色、三十二相無量光明。(40a12)

と。三十二相は、仏、菩薩、轉輪聖王などが備える身体的特徴である。釈尊も仏として当然三十二相を備えているはずであるので、弥勒菩薩の第二の質問のなかに、地涌菩薩の姿が釈尊よりも立派であると述べられているのは、⁽¹⁴⁾「無量光明」とあることに関係しているかもしれない。身体が金色であることは、三十二相の第十五の「金色相」と共通であり、仏の身体の周圍に一丈の光があるのは、第十六の「丈光相」と言われる。⁽¹⁵⁾地涌菩薩が「無量光明」を放っているのは、この通常の「丈光相」よりもすぐれた特徴と言えるかもしれない。

また、地涌菩薩の身体が巨大であると述べられていることも、地涌菩薩のすぐれた特徴とされているようである。ただし、妙音菩薩については具体的に身長の説明があるのに比べると、地涌菩薩についてはそのような記述はない。⁽¹⁶⁾

(4) 地涌菩薩の指導者―四菩薩

地涌の菩薩の中に、四人の指導的立場の菩薩があり、その名は、上行、無辺行、浄行、安立行といわれる。⁽¹⁷⁾

これらの菩薩の集団のなかに四人の指導者がいる。第一に上行、第二に無辺行、第三に浄行、第四に安立行である。この四菩薩は、その集団のなかで、もっとも上位の指導的な師である。

是菩薩衆中有四導師。一名上行、二名無辺行、三名浄行、四名安立行。是四菩薩於其衆中、最爲
上首唱導之師。(40a23-26)

と。ただし、四菩薩についての詳しい説明は何も与えられていない。我々は、彼らの名前から、四菩薩それぞれの修行の性格について少しばかりの情報を得ることができるだけである。

(5) 地涌菩薩の宗教的能力と過去の修行

弥勒菩薩は、地涌菩薩について、

偉大な神通力があり、思議しがたい智慧を持ち、堅固な志を持ち、偉大な忍辱の力を持ち、衆生がその姿を見ることを願うものである。

大神通、智慧叵思議、其志念堅固、有大忍辱力、衆生所樂見。(40b26-28)

と述べている。地涌菩薩が、神通力、智慧、⁽¹⁸⁾忍辱力にすぐれていることを指摘している。「大忍辱力」は、前述したように、宗教的なレベルの低い娑婆世界の衆生に『法華経』を弘通するためには必要不可欠な能力の一つであろう。「志念堅固」については、他の箇所にも「志念力堅固」(41b2)、「志固無怯弱」(42a6)とある。また、⁽¹⁹⁾威徳があり、精進している菩薩であると指摘されている。

では、地涌菩薩は、このような宗教的能力を獲得するために、釈尊の過去世の成仏以来、どのような修行をしてきたのであろうか。この問題については、弥勒の第一の質問に対する釈尊の答えのなかで、

大勢の者たちの所で多く説くことを好まず、常に閑静な場所を好み、熱心に修行し、努力して、まだ休んだことがない。また人々や神々のもとにとどまらない。常に深い智慧を好んで、障害がない。

また常に仏たちの法を好み、ひたすら努力して、最高の智慧を求めている。

是諸善男子等不樂在衆多有所説、常樂靜処、勤行精進、未曾休息。亦不依止人天而住。常樂深智、無有障礙。亦常樂於諸仏之法、一心精進求無上慧。

(41b6-10)

と述べられている。精進して智慧を求めることが指摘されているが、印象深い性質として、「不樂在衆多有所説、常樂靜処」という点がある。また、この箇所と対応する偈頌には、

これら(の菩薩たち)は私の子である。この世界に

止まって、常に頭陀行を修め、閑静な場所を願って、大勢の人のいる騒がしい場所を捨て、多く説くことを好まない。このような子たちは私の教えを学び、昼となく夜となく常に精進する。仏の悟りを

求めるために、娑婆世界の下方の空中に住する。堅固な志の力を持ち、常に熱心に智慧を求め、さまざまならばらしい法を説いて、その心には畏れるものが何もない。

此等是我子。依止是世界、常行頭陀事、志樂於靜処、捨大衆憤鬧、不樂多所説。如是諸子等學習我道法、昼夜常精進。為求仏道故、在娑婆世界下方空中住。志念力堅固、常勤求智慧、説種種妙法、

其心無所畏。(41c5-22)

とある。ここにも、頭陀行、精進、智慧、志念力、無所畏などのほかに、「志樂於靜処、捨大衆憤鬧、不樂多所説」とあるのが注意を引く。また、

大勢の人の中にあることを願わず、常に禪定にあることを好む。仏の悟りを求めるために、下の空中に住する。

不樂在人衆、常好在禪定。為求仏道故、於下空中住。(42a21-22)

とある。引用文のように、静かな場所を好んで禪定の状態にあることを好んでいては、とても弘経はできな

いのではないかという疑問が生ずるかもしれない。しかし、地涌菩薩について、この涌出品における出現までは、弥勒菩薩がこれまで見たことも聞いたこともない存在であると言っているように、あまり人の多くない静かな場所で人知れず修行をしてきたと説明されるのである。地涌菩薩の使命は、釈尊滅後の弘経であるので、そのためには、勸持品に示される忍耐や、安樂行品に示される四安樂行や、法師品に示される如来の衣座室²⁰などの弘経の心構えが必要とされるのである。したがって、地涌菩薩の過去の修行のあり方と釈尊滅後に要請される積極的な弘経とは相違すると考えられる。

また、善根を植え、梵行を修していることを指摘している。

これら(の地涌菩薩)は久しい過去からずっと計量することもできず、限界もない多数の仏たちのもとで、多くの善根を植え、菩薩の修行を完成し、常に清浄な修行を实践した。

斯等久遠已来、於無量無辺諸仏所、殖諸善根、成就菩薩道、常修梵行。(41c9-12)

とある。前の引用文には、頭陀行を修することが取りあげられ、ここでは梵行を修することが取りあげられているので、地涌菩薩は出家者、比丘僧として描写されていることがわかる。

また、

それなのに、これら大勢の菩薩たちは計量することもできない千万億劫の間、仏の悟りのために、熱心に修行し、努力し、計量することもできない百千万億の三昧に巧みに入り、出、とどまり、偉大な神通を得、長い間清浄な修行を实践し、巧みに順序よく多くの善法を習い、問答が得意で、人々の中の宝として、すべての世間の人々にとても稀有な存在であるとされた。

仏亦如是、得道已来其未久、而此大衆諸菩薩等、已於無量千万億劫、為仏道故、勲行精進、善入出住無量百千万億三昧、得大神通、久修梵行、善能次第習諸善法、巧於問答、人中之宝、一切世間甚為希有。(41c13-20)

とある。精進、三昧、神通、梵行、問答に巧みなこと

が取りあげられている。

また、泥水に咲く蓮華のように、世間の法に汚染されない清浄な存在であることを指摘している。⁽²¹⁾

また、

これらの菩薩たちは、志が堅固で臆病なところはない。無量劫以来、菩薩道を行ってきた。難しい問答に巧みで、その心に畏れるものが何もなく、忍辱心が確定しており、端正で威徳がある。十方仏にたたえられる。巧みに詳しく説く。

是諸菩薩等志固無怯弱。從無量劫來而行菩薩道。

巧於難問答、其心無所畏、忍辱心決定、端正有威徳。

十方仏所讚。善能分別説。(42a16-20)

とあり、忍辱心や巧みな説法の能力に言及している。

また、多くの経典を説誦し、通曉しているとされる。⁽²²⁾

ここに取りあげられた地涌菩薩の過去の修行は菩薩道としての六波羅蜜の内容と重なるものが多く、決して特殊なものではないが、それらを長い期間にわたって実践してきたために、十方の仏に讃歎されるようなすぐれた宗教的能力を身につけたと説かれているので

ある。

(6) 過去久遠からの弟子

先に述べたように、弥勒の地涌菩薩に対する第一の質問に対する釈尊の答えは、地涌菩薩は、自分の成仏以来、教化した弟子であるというものである。

私はこの娑婆世界で最高の正しい悟りを得てから、これらの菩薩たちを教化指導し、その心を調え、菩提心を生じさせたのである。

我於是娑婆世界、得阿耨多羅三藐三菩提已、教

化示導是諸菩薩、調伏其心令發道意。(41b24)

とある。この箇所に対応する偈頌にも、

これらの大菩薩たちは無量劫以来、仏の智慧を修めてきた。すべて私が教化したもので、偉大な菩提心を生じさせた。

是諸大菩薩從無量劫來、修習仏智慧。悉是我所化、

令發大道心。(41b2-14)

とある。⁽²³⁾

このように、地涌菩薩は釈尊が遠い過去世から教化した者であることを明かしているが、より詳しくは、

次の如来寿量品において説き明かされるのである。

(7)菩薩の階位Ⅱ不退

地涌菩薩は、不退の位に住し、将来の成仏が確定していると言われる。

(地涌菩薩は)今みな不退(の位)に住し、すべて成仏することができるであろう。

今皆住不退 悉当成仏。(41p26)

とある。「不退」については、弥勒の第二の質問の偈にも、願わくは、今解説してください。これらの無量の菩薩たちについて、どうして短期間に教化し、発心させ、不退地に住させたのかを。

願今為解説、是无量菩薩云何於少時教化令発心、而住不退地。(42p26-28)

とある。『法華経』の中では、「不退」が菩薩のどの位に相当するかという説明はないが、かなり高い位のはずである。

2・2 如来神力品における地涌菩薩の弘経の誓願

涌出品において出現した地涌菩薩は、如来神力品第

二十一の冒頭において、釈尊滅後の弘経を次のように誓願する。

そのとき、地より涌出した三千大千世界の極微の粒子ほど数の多い菩薩摩訶薩は、みな仏の前で、一心に合掌して尊いお顔を仰ぎ見て、仏に申し上げた。「世尊よ。私たちは仏滅後に、世尊の分身のいる国土や涅槃に入った場所で、広くこの経を説きます。なぜならば、私たちもまた自らこの真実で清浄な大法を得て、これを受持・読・誦・解説・書写し供養しようと思うからです」と。

爾時千世界微塵等菩薩摩訶薩從地踊出者、皆於仏前、一心合掌、瞻仰尊顔、而白仏言、世尊。我等於仏滅後、世尊分身所在国土、滅度之處、当広説此経。所以者何、我等亦自欲得是真浄大法、受持読誦解説書写、而供養之。(51c9-14)

地涌菩薩は釈尊の滅後、娑婆世界を中心とする釈尊の活動を展開した場所で、『法華経』を弘通することを誓っている。地涌菩薩は釈尊の過去久遠の昔からの弟

子であるので、声聞たちが娑婆世界以外の国土での弘通を誓ったのと相違して、あくまで、釈尊の衆生救済の事業を継承する者として、娑婆世界を中心として活動を展開するのである。⁽²⁴⁾

この地涌菩薩の申し出に対し、釈尊は次のように指示するのである。

如来のすべての持っている法と、如来のすべての思いのままの神通力と、如来のすべての秘密の要旨の蔵と、如来のすべてのとても深遠な事からについては、すべてこの経において述べ、示し、顕わし、説いた。このため、あなたたちよ。如来が涅槃に入った後に、ひたすら受持し、読み、誦し、解説し、書写し、説かれるとおりに修行すべきである。

如来一切所有之法、如来一切自在神力、如来一切秘要之蔵、如来一切甚深之事、皆於此経宣示顕説。是故汝等於如来滅後、一心受持読誦解説書写、如説修行。(52a17-21)と。

これは地涌の菩薩に対する修行の指示であるが、『法

華経』に対する五種法師の修行や如説修行を勧めているのであるから、『法華経』の付嘱と言ってもよいであろう。

さらに、嘱累品では、釈尊は地涌菩薩をはじめとする多くの菩薩たちに、『法華経』をはっきりと次のように付嘱する。

そのとき、釈迦牟尼仏は法座から起って、偉大な神通力を示して、右手で無量の菩薩摩訶薩の頭頂を撫でて、このように言った。「私は無量百千万億阿僧祇劫において、この獲得しがたい最高の正しい悟りの法を修行した。今、あなたたちに付嘱しよう。あなたたちは一心にこの法を流布して広く利益を増大させるべきである」と。

爾時釈迦牟尼仏従法座起、現大神力、以右手摩無量菩薩摩訶薩頂、而作是言、我於無量百千万億阿僧祇劫、修習是難得阿耨多羅三藐三菩提法。今以付嘱汝等。汝等应当一心流布此法広令増益。(52c4-8)

と。

2・3 法師品における願生の菩薩

法師品には、『法華経』の信仰者がいかなる宗教的境界にある者であるかについていろいろと説明している。

『法華経』は、釈尊臨終直前の説法であると位置づけられているので、法師品に描かれる「『法華経』の信仰者」とは、実際には釈尊滅後の『法華経』の担い手と言ってもかまわない。したがって、これはとりもなおさず地涌菩薩を指すので、法師品の説明は地涌菩薩を理解するうえで看過できない重要性を持つてゐると言えよう。ただし、この問題については前稿で詳しく考察したことがあるので、⁽²⁵⁾ここでは要点のみを記す。

『法華経』の信仰者は、過去世において多くの仏たちを供養し、成仏の大願を実現したものであり、本当はそのすばらしい果報を満喫享受していればよいのであるが、衆生を憐れむ大慈悲心によってこの悪世に生まれてきたとされる。⁽²⁶⁾また、最高の正しい悟りを完成した大菩薩とされ、如来に対する供養と同じように供養される尊い存在であることが強調されている。⁽²⁷⁾さらに、清浄な業の果報を捨てたと指摘されている。⁽²⁸⁾つまり、ここ

には、業生ではなく、願生に基づいて娑婆世界に生まれてくる菩薩が説かれている。このいわゆる願生の菩薩は、すでに部派仏教時代の大衆部の思想のなかに見られる。⁽²⁹⁾この規定は、そのまま地涌菩薩にあてはまるのである。そして、願生の菩薩は地涌菩薩は、

この人は如来の使者として如来に派遣され、如来の仕事を実行するものであると知るべきである。

当知是人、則如来使、如来所遣、行如来事。

(30:27-28)

とあるように、「如来使」と規定される。

3 結論

『法華経』は、西方の阿弥陀如来や東方の薬師如来の救済ではなく、歴史上、この娑婆世界に実在した釈尊の背景に久遠の釈尊を発見し、久遠の釈尊による娑婆世界の衆生の救済を主題としている。久遠の釈尊は、長遠な寿命を持っているけれども、「方便現涅槃」という思想に基づいて涅槃に入る。久遠の釈尊が涅槃に入った後に、釈尊の仕事を継承する者が地涌菩薩にほか

ならない。そうであれば、地涌菩薩が娑婆世界に我々にとつての現実の世界、社会を、救済事業を遂行する場として重視することは当然のことであろう。『法華経』において授記された声聞たちが、おそらく「大忍辱力」を欠如しているために、娑婆世界での『法華経』の弘通を辞し、他の国土での弘通を誓うという話は、逆に地涌菩薩と娑婆世界との密接な関係を示唆するものである。

また、娑婆世界の重視は、久遠の釈尊が常に靈鷲山に住するという如来寿命品の思想にもよく示されている。娑婆世界の重視とは、我々が住むこの現実世界を重視するということである。

そして、この地涌菩薩は、「如来使」として如来に派遣され、如来の仕事である『法華経』弘通による衆生救済の仕事を担うとされるのである。このように仏に特別に選ばれ、仕事を託されたとする意識は、一般に使徒意識と呼ばれるが、この使徒意識が苦難に満ちた現実社会での『法華経』の弘通に基づく衆生救済の活動を支える根拠となるのである。勸持品における使徒意識

に基づく忍耐の強調は、それをよく示している。

日蓮の思想・行動に見られる現実社会の重視は、『法華経』の現実世界の重視の思想に影響を受け、また法華経の行者、地涌菩薩としての使徒意識、つまり娑婆世界における『法華経』の弘通による衆生救済を根拠とするものであったと言えよう。これは、現代の法華系新宗教の現実社会重視の思想にも一定の影響を与えていると考えられる。

注

- (1) 中国では、「涌出菩薩」という呼称のほうが一般的であるが、『法華玄義』巻第十上、「若彼列衆、十方雲集。皆是盧舍那仏宿世知識。此経雲集地涌菩薩、皆徒釈尊發心。是我所化。此一往則齊、而不無疎密。」(T33:801a7)、『法華文句記』巻第四下、「下方等者、挙本別由以責古釈。塔現証前、兼為起後。故宝塔踊為本遠由、地涌菩薩為本近由。」(T33:2335-6)には、「地涌菩薩」という語句も出る。

- (2) 『太虚大師全書』第十卷・十一巻所収。

- (3) 拙稿『法華経』における菩薩道と現実世界の重視」(『東洋学術研究』46-1、2007:5、86-103頁)を参照。

(4) 拙稿『法華経』における常不軽菩薩の實踐と中国・日本における展開」(『東洋学術研究』40・2、2001・12、70-87頁、『法華経思想史から学ぶ仏教』所収、2003年、48-64頁)を参照。

(5) 日蓮は、五十六歳のときの「頼基陳状」に「日蓮聖人は御経にとかれてましますが如くば、久成如来の御使、上行菩薩の垂迹、法華本門の行者、五百歳の大導師にて御座候聖人を、頸をはねらるべき由の申状を書て、殺罪に申行はれ候しが、いかが候けむ死罪を止て佐渡の島まで遠流せられ候しは、良寛上人の所行に候はずや。」(『昭和定本日蓮聖人遺文』1252頁)と述べている。渡辺寶陽「日蓮の『法華行者』意識と『地涌菩薩』認識」(日本仏教学会編『菩薩観』、平楽寺書店、1986年、445-458頁)、浅井圓道「上行菩薩」(『金岡秀友博士還暦記念論文集・大乘菩薩の世界』所収、佼成出版社、1988年、171-181頁)を参照。

なお、地涌菩薩は、歴史的視点から『法華経』の成立を見た場合、インドにおける『法華経』成立時点での『法華経』編纂者とその周辺の信仰者を、地涌菩薩という經典の登場人物として表現したと推定される。また、中国では、『法華経』に説かれるような釈尊滅後の歴史的世界に出現する実在の菩薩像としては捉えられなかったようである。

(6) 戸田城聖氏は、「第二回男子青年部総会」(1953年12月23日、東京・星薬科大学講堂)において、「日蓮大

聖人様の内証は、無作三身の如来である。私の内証は、地涌の菩薩の棟梁である。外用は、折伏の大將である。」(『戸田城聖全集』第四巻、106頁、聖教新聞社、1984年)と述べている。この自覚は、彼の獄中の宗教体験に基づくものである。戸田城聖著「小説 人間革命」(『戸田城聖全集』第八巻「聖教新聞社」、1988年)519頁)を参照。

なお、日蓮宗法音寺(前身は仏教感化救済会)の始祖、杉山辰子氏(1867-1932)が四菩薩のなかの安立行菩薩の再誕としての自覚を持ったことについては、ランジヤナ・ムコパディヤヤー(Ranjana Mukhopadhyaya)『社会参加仏教』(東進堂、2005年)132-137頁を参照。

(7) 「三変土田」の用例は、『法華玄義』巻第六上(T33.751c10)などを参照。

(8) この四安樂行の名称については注釈家によって相違するが、いまは智顛・灌頂『法華文句』の説にしたがう。道生、法雲、慧思、吉藏などの四安樂行の名称については、拙稿『法華経安樂行義』の研究(2)、『東洋哲学研究所紀要』20、2004・12、53-81頁)を参照。

(9) たとえば、勸持品、「此諸比丘等為貪利養故、説外道論議、自作此經典、誑惑世間人。為求名聞故、分別於是経。」(T34.36c3-6)を参照。

(10) 多数であることを指摘しているだけで、「六万恒河沙」という具体的な数字をあげない場合もある。「此大菩

薩衆、假使有人於千萬億劫、數不能盡、不得其辺。」(41c9-10)、「此諸仏子等、其數不可量。」(42a3)を参照。

(11) 引用した長行に対応する偈頌には、その点がより明了に示されている。「一諸菩薩所將諸眷屬、其數無有量、如恒河沙等。或有大菩薩、將六万恒沙。如是諸大衆、一心求仏道。是諸大師等六万恒河沙、俱來供養仏、及護持是經。將五万恒沙、其數過於是。四万及三万、二万至一万、一千一百等、乃至一恒沙、半及三四分、億万分之一、千万那由他、万億諸弟子、乃至於半億、其數復過上。百万至一万、一千及一百五十与一十、乃至三二一、单已無眷屬、樂於独处者、俱來至仏所、其數轉過上。」(40b29-40c15)を参照。

(12) 前注11を参照。

(13) 『法華玄義』卷第七下の本眷屬妙の冒頭にも、「七本眷屬妙者、經云、此諸菩薩下方空中住。此等是我子、我則是父。下方者、下名為底。大品有諸法底三昧。釈論云、智度大道仏窮底。當知此諸菩薩隣仏窮智度底。虚空者、法性虚空之寂光也。従本時寂光空中、出今時寂光空中。今時寂光空中者、不識本時者。故言、我經遊諸国、乃不識一人。地涌千界皆是本時心眷屬也。」(T33, 768b5-12)にあつた。

(14) 「譬如有人、色美髮黑、年二十五、指百歲人、言是我子、其百歲人亦指年少、言是我父、生育我等、是事難信。」(41c13-15)を参照。

(15) たとえば、『大智度論』卷第四に「十四者金色相。……十五者丈光相。四辺皆有一丈光。仏在是光中端嚴第一。」(T25, 90b26-c9)を参照。三十二相には経論によつて異なる種類があるが、身体から光を放つという相は必ずしも一般的ではないようである。

(16) 「巨身」(40b26)を参照。妙音菩薩品第二十四では、妙光菩薩が淨華宿王智仏の淨光莊嚴世界から娑婆世界にやつて来る。淨華宿王智仏は、娑婆世界の衆生は身体が小さく、妙音菩薩の身体は巨大であるため、娑婆世界の衆生を軽んじることのないように、妙音菩薩に忠告を与えている。「爾時淨華宿王智仏告妙音菩薩、汝莫輕彼国、生下劣想。善男子。彼娑婆世界高下不平、土石諸山穢惡充滿、仏身卑小。諸菩薩衆其形亦小、而汝身四万二千由旬、我身六百八十万由旬。汝身第一端正、百千万福、光明殊妙。是故汝往、莫輕彼国、若仏菩薩及国土、生下劣想。」(55b8-14)を参照。

(17) 四菩薩の名称の仏教的意味については、有賀要延『法華経』地涌菩薩について(一)、『印度学仏教学研究』21(1、1972・12、128-129頁)を参照。

(18) 神通と智慧については、「如是諸菩薩神通大智力。」(40c22)を参照。また、弥勒の第二の質問の偈のなかにも、「此諸仏子等其數不可量、久已行仏道、住於神通力。」(42a3-4)とある。

(19) 「是諸大威徳 精進菩薩衆」(40c18)を参照。

(20) 法師品には、如来が涅槃に入った後に、四衆のため
に『法華経』を説こうとする場合、その説き方につい
て、如来の室に入り、如来の衣を着、如来の座に坐
して『法華経』を説くべきであると示される。如来の
室とはすべての衆生に対する大慈悲心(無限に慈しみ
同情する心)であり、如来の衣とは柔和忍辱心(優し
く穏やかで堪え忍ぶ心)であり、如来の座とは一切法
空(すべての存在が空であること)であると説明され

る。「若有善男子善女人、如来滅後、欲為四衆說是法
華経者、云何心説。是善男子善女人入如来室、著如
来衣、坐如来座。爾乃應為四衆広説斯経。如来室者、
一切衆生中大慈悲心是。如来衣者、柔和忍辱心是。
如来座者、一切法空是。」(30c21 - 27)を参照。

(21) 「諸仏子等其数不可量、久已行仏道、住於神通力、善
学菩薩道。不染世間法、蓮華在水。」(42c3-6)を参照。
(22) 「於諸經典誦誦通利、思惟分別正憶念。」(41b5 - 6)を
参照。

(23) また、「我従久遠来、教化是等衆。」(41b28)、「斯等
久遠已来、於無量無辺諸仏所、殖諸善根、成就菩薩道、
常修梵行。」(41c9 - 12)を参照。

(24) 「爾時他方国土諸来菩薩摩訶薩過八恒河沙数、於大衆
中起立、合掌作礼、而白仏言、世尊。若聽我等於仏
滅後、在此娑婆世界、勲加精進、護持説誦、書写供
養是經典者、当於此土而広説之。爾時仏告諸菩薩摩
訶薩衆、止善男子。不須汝等護持此経。所以者何、

我娑婆世界自有六万恒河沙等菩薩摩訶薩、一一菩薩
各有六万恒河沙眷属。是諸人等、能於我滅後、護持
説誦広説此経。」(30c19 - 28)を参照。

(25) 拙稿『法華経』における菩薩道と現実世界の重視』
『東洋学術研究』46・1、2007・5、86―103
頁)を参照。

(26) 「当知諸人等已曾供養十万亿仏、於諸仏所成就大願、
愍衆生故、生此人間。」(30c13 - 15)を参照。

(27) 「当知此人是菩薩、成就阿耨多羅三藐三菩提、哀愍
衆生、願生此間、広演分別妙法華経。」(30c21 - 23)
を参照。

(28) 「当知是人自捨清浄業報、於我滅度後、愍衆生故、生
於惡世、広演此経。」(30c24 - 26)を参照。

(29) 玄奘訳『異部宗輪論』、「菩薩為欲饒益有情、願生惡趣、
随意能往。」(T 49, 15c10-11)を参照。異訳の真諦訳『部
執異論』、「若菩薩有願欲生惡道、以願力故、即得往生。」
(T 49, 20c11 - 12)を参照。

(かんの ひろし/創価大学教授)